

「愛し抜かれた主」

ヨハネによる福音書 13 章 1-11 節

「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(1 節)。

「この上なく」という言葉には、「最後まで」とか「完全に」という意味があります。イエスさまの愛は途中で放棄するようなものではありません。最後の最後までとことん愛する愛です。

でも、イエスさまが愛された弟子たちとは、どういう人たちだったのでしょうか。そこにはイエスさまを裏切ろうとしていたユダがいます。「あなたのためなら、命を捨てます」とまで言い切りながら「イエスなんか知らない」と誓ってしまうペトロがいます。この二人だけではありません。すべての弟子たちが、今夜、イエスさまを見捨てて逃げ去ってしまうのです。イエスさまがこの上なく愛された弟子というのは、イエスさまを認めようとせず、受け入れないすべての人間のことです。その中に、私たちも入っているのです。そんな私たちをイエスさまは愛し抜かれるのです。そして、その愛を具体的に示すためにイエスさまがなされたことが、足を洗うということでした。

当時、足を洗うのは奴隷の仕事でした。それをイエスさまがしたわけですから、弟子たちの驚きようはどれほどであったかと思います。ですから、ペトロが、なぜそんなことをするのか分からないと言ったのは当然です。

では、なぜイエスさまは、このようなことをなされたのでしょうか。一つには、謙遜になること、互いに愛し合うことの大切さを教えるためでした。この時の弟子たちは、「だれが一番偉いのか」ということを言い争っていたのです。その弟子たちに対して、互いに愛し合うことを教えられた。これが一つ目のメッセージです。しかし、もう一つ、そのこと以上に大切なことがここには示されています。それはイエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しです。

ここで注目したいことは、4 節の「上着を脱ぎ」という言葉と、12 節の「上着を着て」という言葉です。イエスさまの弟子の足を洗うという行為は、上着を脱ぐところから始まって、上着を着たところで終わっています。別にイエスさまが上着を脱いだり着たりしたなんてことは、書かなくても話は通じます。だけど、ヨハネはここでわざわざそのことを記しているのです。そして、ここで使われている「脱ぐ」「着る」という言葉は、ヨハネによる福音書の 10 章 17 節では、命を「捨てる」「受ける」と訳されています。つまり、イエスさまが上着を脱がれたという行為は、十字架で命が捨てられるということを表し、上着を着たという行為は、再び命を得るといふ復活を表しています。そして、その十字架と復活の間に入っているのが、弟子の足を洗うという行為です。

しもべとなって弟子の足を洗ってくださったイエスさまの愛は、イエスさまが十字架で死に、復活されたことによって私たちの罪が洗い清められる救いのメッセージです。つまり、イエスさまが弟子たちの足を洗われたという行為は、十字架の贖いの死と、勝利の復活を示す「しるし」なのです。

ただ、この時の弟子たちには、イエスさまの真意が分かりませんでした。それゆえペトロは言います。「わたしの足など、決して洗わないでください」と。イエスさまに足を洗っていただくなどんでもない。そう思ったのでしょう。けれども、このペトロの拒否は、イエスさまの救いを、イエスさまの愛の行為を拒もうとすることでした。

イエスさまは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と言われました。私の命懸けの愛を拒むなら、あなたは私のものではなくなる。十字架と復活の救いがなければ、私の愛から落ちてしまう、そう言われたのです。

足を洗ってもらわないということが、イエスさまとの関係がなくなってしまうほどの大事だと知ったペトロは、それならば、足だけでなく全部洗ってほしいと言いました。それに対して、イエスさまは、「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい」と答えられました。

イエスさまによって招かれ、イエスさまのもとに集められた者は、もう既に神さまの救いの出来事の中に入れられています。私たちが教会へと呼び集められて、ここにいる。このこと自体が、もう救いの出来事です。けれども、まことの罪の赦し、罪からの清めというのは、イエス・キリストの十字架の死によって成し遂げられるものです。そのこと以外に、私たちの罪を清められるものはありません。逆に言えば、そのこと以外に必要なものは何もないということです。ですから、イエスさまは、「足だけ洗えばよい」と言われるのです。

しかし、続けてイエスさまはこうも言われました。「あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない」と。

これは、イエスさまの愛の中にありながら、その愛から落ちてしまうユダの存在を深く悲しみ、その痛みを痛烈に感じておられるイエスさまの言葉です。この言葉は、ユダを非難しているのではありません。そうではなくて、イエスさまの愛が届かない、その悲しみです。その嘆きです。そして、どうかこの愛を受けるものであってほしい、これはその願いです。イエスさまは、何とかしてユダを取り戻したいのです。すでにユダは、イエスさまを売る約束を祭司長たちとかわし、報酬の銀貨も受け取っています。イエスさまは、そのことご存じでしょう。でも、それでもなおユダに手を差し伸ばしている。諦めることもなく、見捨てることもない。それがイエスさまの愛なのです。最後まで、この上なく愛し抜かれるイエスさまの愛なのです。

ユダだけではありません。これほどまでの愛をもって、この私をも愛し抜いてくださっている。その愛によって、私たちの罪は赦され、生かされているのです。この恵みを心から感謝する者でありたいと願います。